

# デンマークの宗教学

## —歴史と現在，理論的方向性と社会における役割—

藤井 修平

### 1. はじめに

本論はデンマーク王国における宗教学の歴史と現状を明らかにすることを目的とする。これまで、デンマークの宗教学はその内容はおろか、存在すら触れられることがほとんどなかったといえる。2010年から実施された日本学術振興会の科学研究費補助金基盤研究（B）「宗教概念ならびに宗教研究の普遍性と地域性の相関・相克に関する総合的研究」は世界各地の「宗教学」の状況を把握することが目的であり、ヨーロッパ諸国からはイタリア、フランス、ドイツが対象になっているが、デンマークは言及されていない。視野を国際的に広げても同様に、エリック・シャープの1975年の論文「スカンディナヴィアの宗教史：とりわけスウェーデンとフィンランドに関して」では「デンマークはスウェーデンと同様に、宗教史における素晴らしい歴史的・批判的学問の長い伝統が存在している」<sup>(1)</sup>と述べられているものの、言及はいくつかの研究の紹介に留まり、その性格や歴史については触れられていない。より近年のものでは、2007-2009年のミヒヤエル・シュタウスベルクの連作論文「西欧における宗教学」でも第2編でフィンランドが、第3編でスウェーデンとノルウェーが解説されているが、デンマークに関してはわずかな記述しかない。その後、デンマークの宗教学者ティム・イェンセンとアルミン・ギアーツによる2014年の英語論文「デンマークにおける宗教史から宗教学への変遷」によってはじめてデンマーク宗教学の歴史が国際的に紹介されたといえる。この論文はデンマーク宗教学の制度上の歴史を詳述しているものの、研究史についてはごく簡潔な言及に留まっている。

このようにほとんど触れられることのないデンマークであるが、そこには確かに「宗教学」と呼べるものが存在している。その何よりの証左となるのが、2010年と2015年に刊行された2巻本『宗教研究の過去と現在 *Religionsforskningen før og nu*』である。本書の第1巻では「デンマーク宗教学」も含めた宗教学の成立過程がその前史から詳細に記述され、第2巻では現代における多様な視点とアプローチが包含されている。本書がデンマーク語で刊行されたという事実が、国内の宗教学的関心の高さをしるし付けているのは疑いないだろう。

本論文はそうしたデンマーク宗教学を対象に、その歴史と理論的方向性および現代における宗教学者の活動を、現地で得られた資料を元に明らかにする。その際にまず、研究の視点となる2つの疑問を提示することから始めよう。

第1の疑問は、宗教現象学に関するものである。デンマーク宗教学の拠点の一つであるオーフス大学では、宗教学専攻の2017年秋学期の学部授業に、必須科目として「宗教現象学」が存在している。これは奇妙なことである。というのも宗教現象学という分野は宗教学の歴史上すでに否定されたもの、あるいは新たなアプローチに取って代わられたものという見方が大勢を占めているか

らだ。前述のシュタウスベルクの論文でも、第二次大戦後から 1980 年代までを宗教現象学の最盛期とし、それ以後は「宗教現象学の落日」<sup>②</sup>が訪れたと述べられている。宗教現象学の歴史を詳細に扱ったジェームズ・コックスの『宗教現象学への手引き *A Guide to the Phenomenology of Religion*』でも、1990 年代以降宗教現象学に手厳しい批判が寄せられたことを伝えている<sup>③</sup>。このような状況にもかかわらず、宗教現象学が科目として教えられていることは異例といえる。なぜ、オーフス大学には宗教現象学が未だに存在しているのか、そしてその内容はいかなるものか。これがデンマーク宗教学に対する第一の疑問である。

第二の疑問は、近年の変化に関するものである。21 世紀に入って、自然科学的知見を取り入れた新分野である宗教認知科学 (cognitive science of religion, CSR) が成立したことは拙論「宗教認知科学の成立史」<sup>④</sup>で述べた通りだが、オーフス大学はこの CSR の成立とその後の発展に深く関わっており、さまざまなプロジェクトの実施に加え、現在では宗教学専攻内の 4 つの研究ユニットの一つとして「宗教・認知・文化」ユニットが存在している。2018 年 5 月には同ユニットが研究大会“Nordic Network for the Cognitive Science of Religion”を主催し、北欧のみならず英国やオランダ、南米からも研究者を呼び集めた。ここでの疑問は、なぜオーフス大学の宗教学がこれほど積極的に CSR の導入を推し進めたかである。上記論文で明らかにしたように、CSR の成立に主に関わったのはピュシアイネンやローソンを除けば人類学者がほとんどであり、宗教学としてこの分野に参加したのは稀有な例といえる。この点にも、デンマーク宗教学の特徴が現れていると考えることができる。

以下ではこれらの疑問を明らかにするために、デンマーク宗教学の歴史と現状をその制度的側面、研究者と理論的方向性、および社会における役割の観点から分析を行う。

## 2. デンマーク宗教学の制度史

まずは、前述のイェンセンとギアーツの論文を中心に、デンマーク宗教学の制度としての成立史を記述しよう<sup>⑤</sup>。

デンマークの大学における宗教学の講座はコペンハーゲン大学、オーフス大学、南デンマーク大学の 3 つの公立大学にのみ存在する。その内でもっとも成立が早いのはコペンハーゲン大学である。同大学では 1900 年に哲学科内に「宗教史 Religionshistorie」<sup>⑥</sup>の講座が設けられた。最初に教授に就任したのはイズヴァト・リーマン Edvard Lehmann<sup>⑦</sup>である。設立の経緯は、周辺諸国での幅広い形の宗教研究に対する関心の高まりにある。講座設立の趣意書では、オランダ、フランス、ドイツに純粋に歴史的な宗教研究が設置されたこと、シャントピー・ド・ラ・ソーセイの『宗教史大系 *Lehrbuch der Religionsgeschichte*』のインドやギリシア宗教の項目をリーマンが担当しており、適任であることなどが述べられている<sup>⑧</sup>。このようにオランダ宗教学の影響の下に成立した宗教史講座だが、その研究対象からはキリスト教が外されていた。キリスト教は、1912 年に新設された「キリスト教学 *Kristendomskundskab*」で扱われるようになった。この教育プログラムは、高等学校にあたるギムナシウムの「宗教」の授業を担当する教員を養成するために設置されたもので、神学部と哲学部の共同で運営されていた。

リーマンは 1910 年にベルリン大学 (現フンボルト大学) に新設された宗教史・宗教哲学教授として招聘され<sup>⑨</sup>、さらに 1913 年にはスウェーデンのルンドに移った。コペンハーゲン大学の教授職

は、ヴィルヘルム・グランベク Vilhelm Grønbech が引き継いだ。その後 30 年以上同地で教えたグランベクは、以後のデンマーク宗教学の形成に大きな影響を及ぼすことになった。というのも、彼の教え子が拡大する大学組織内で中心的役割を果たしたからである。その一人のスヴェン・オーウ・パリス Svend Aage Pallis は 1943 年にグランベクの地位を引き継いだ。そして 1964 年に次の教授となったのも、同じくグランベクの弟子のヤーン・プリュツ・ヨハンセン Jørgen Prytz Johansen であった。また 3 人目の教え子ハルフダン・シーア Halfdan Siiger は、後述のようにオーフス大学の初代教授を務めている。

再び制度面に目を向けると、デンマークの大学では学部の下位区分にあたる学科 Institut は 1970 年までは設置が義務付けられておらず、宗教史も講座としての存在のみであった<sup>(10)</sup>。コペンハーゲンに宗教史学科が生まれたのは 1969 年であり、翌年にはさらに学科「宗教社会学 Religionssociologi」も新設され、パリに学んだアーリル・ヴィトフェルト Arild Hvidfeldt<sup>(11)</sup>が教授となった。また 1973 年にキリスト教学が神学部から宗教史学科に移され、これによりキリスト教が初めて宗教史の対象に含まれることになった。この時点では宗教史、宗教社会学、キリスト教学がある程度の距離を保ちながら併存していたといえるが、その後の改組により宗教史と宗教社会学は統合され、現在では人文学部通文化・地域研究学科内に「宗教学 Religionsvidenskab」<sup>(12)</sup>専攻と名前を変えて存在している。

ユトランド半島東岸に位置するデンマーク第二の都市オーフスに開かれたオーフス大学では、1950 年代からキリスト教学の授業が行われていたが、その科目に含まれる宗教史の教育を補うために人文学部内に教授職が設置されたのは 1960 年のことであった。初代教授はグランベクの教え子ハルフダン・シーアである。キリスト教学の学生の急増に伴い人手が足りなくなると、1969 年にコペンハーゲン大学の宗教史の学位を有するイーレク・ホー Erik Haarh を加えた。また 1971 年にはキリスト教学科が神学部内に独立し、宗教史学科も同時期に設置された。

とりわけ大きな転機を迎えたのが 70 年代である。1972 年には博士号にあたる Mag.Art. の学位までを提供できる教育プログラムが設けられた。この時期の学生数を記した資料を参照すると、1961 年時点ではキリスト教学 41 人、宗教史 1 人であり、68 年になると前者は 141 人と急増するが、後者は 6 人に留まっている。72 年以降に宗教史の生徒の顕著な増加が見られ、75 年にはキリスト教学 161 人、宗教史 43 人となる<sup>(13)</sup>。この時期から宗教史分野が活発化したのが読み取れるだろう。70 年代の終わりには神学者のベント・スミット・ハンセン Bent Smidt Hansen が加わり、シーアが 79 年に退職するとオーフス大学で宗教史の学位を得たアルミン・ギアーツ Armin W. Geertz、イエンス・ピーダ・シュト Jens Peter Schjødt が雇われ、後に教授となった。その後は同様に大規模な改組を経て、現在では文学部文化・社会科学に宗教学専攻として存在している。

コペンハーゲンとオーフスの中間にあるフューン島に位置するオーデンセには、1966 年に南デンマーク大学（旧称はオーデンセ大学）が創設された。同大学はギムナシウムの教員養成を主眼に置いており、すべての科目を網羅するために宗教とキリスト教学の教育の設置が検討された。その計画は、1982 年に宗教研究の「センター」を設け、そこにキリスト教学を含める形で実現した。教員はオーフス大学で学位を取得したイエベ・シンディング・イエンセン Jeppe Sinding Jensen が准教授となったが、彼がオーフス大学に移るにあたり、ティム・イエンセン Tim Jensen と交代した。現在では哲学との統合を経て、人文学部歴史学科内に「宗教研究 Religionsstudier」分野として存

在している。

分野の発展を記述するためには、学術組織と学術雑誌にも目を向ける必要があるだろう。デンマークの宗教学の組織は、1980年に「宗教史学会 Religionshistorisk Forening」がコペンハーゲンで立ち上げられていたが、全国規模のものは1982年に「デンマーク宗教史学会 Danish Association for the History of Religions, DAHR」が設立されたことで実現した。設立にはコペンハーゲン大学とオーフス大学が関わり、1985年には国際宗教学宗教史会議 (IAHR) に加わり、DAHRの代表がIAHR国際委員会の委員となった<sup>(14)</sup>。DAHRは2010年に、「デンマーク宗教学会 (DASR)」に名称を変更した。IAHRとの結びつきはその後も継続し、1990年からはオーフス大学のギアーツがIAHR役員となり、1995年から10年間は彼がIAHR事務総長を務めた。それを引き継いだのが南デンマーク大学のティム・イェンセンであり、彼はその後IAHR会長に就任している。

宗教学の学術雑誌が刊行されたのも同じく80年代である。1982年に、コペンハーゲンでは *Chaos* が、オーフスでは『宗教学雑誌 *Religionsvidenskabeligt Tidsskrift*』が刊行された。どちらもデンマーク語の学術雑誌として機能していたが、前者は後にノルウェーとスウェーデンの宗教学会も包括し、スカンディナヴィア地域の宗教学雑誌としての役割を果たすようになった。その他国内には、ギムナシウムの宗教教師協会が発行する *Religion* が存在する。加えて、1987年から刊行されている英語雑誌の *Nordic Journal of Religion and Society*、フィンランドの *Temenos* の編集委員にもデンマークの宗教学者が加わっている。さらにギアーツとシンディング・イェンセンは1998年から10年以上、北米宗教学会 (NAASR) の雑誌 *Method and Theory in the Study of Religion* の編集委員を務めている。

以上の制度の変遷をまとめると、デンマーク宗教学は1900年に最初の講座が設置されて以来、教授とその教え子による研究の伝統は脈々と続いてきたものの、その制度的体制が十分に整ったのは1970年代から80年代にかけてだといえるだろう。その歴史の中でしばしば言及されるのが公立学校における教育との関わりであるが、この点については後述する。

### 3. デンマーク宗教学の研究者

次に、デンマーク宗教学のこれまでの研究者とその理論的方向性について記述していきたい。イェンセンとギアーツの前掲論文では、デンマーク宗教学の性格について「類型論にせよ発展論にせよ、比較論的、通文化的研究は宗教学が宗教の科学一般となるための必須条件であるという信念は、ほとんどのデンマークの研究者に共有されている」<sup>(15)</sup>とのみ述べられているが、この点についてより詳しく明らかにせねばならない。デンマーク宗教学の性質について述べたものとしては、オーフス大学のヨン・ボルプ Jørn Borup が一般紙『キリスト日報 *Kristeligt Dagblad*』に寄稿した記事「宗教批判の必要性」も参考になる。ここで彼は、教会関係者の護教的な発言に触れ、宗教学の意図はそれとは異なっていると述べる。「宗教学は歴史的には、宗教を歴史的・文化的現象として外部から分析する権利を有するものとしての宗教批判に基づいている。この点が、デンマークと西洋の宗教学を世界のその他の大多数から区別している」のであり、そうした大多数の地域として宗教批判が禁じられているイスラム諸国の多くや、説教に等しい講義すら見られる米国が挙げられている。彼は「デンマーク（や北欧）では分析的に距離を保った宗教研究の長い伝統を有している」<sup>(16)</sup>と述べ、そこでは価値中立的な宗教研究が探求されているという。そのような宗教研究の伝統とは

いかなるものか、その初期の研究者に遡って分析しよう。

### 3-1. イズヴァト・リーマン

前述のように、デンマークで最初に宗教学の講座を担当したのはリーマンである。彼の先駆者としては神学者ヨハネス・フィービガ Johannes Fibiger (1821-1897) や宗教史家ハンス・ゾーフス・ヴォズスコウ Hans Sofus Vodskov (1846-1910) の名も挙げられているが<sup>(17)</sup>、以下では標準的な見解に従い、リーマンから話を始めることとする。彼が国内で教えた期間は短いものの、その功績は現在でも注目されている。リーマンについてはシャープやコックスの著作でもほぼ触れられておらず、ファン・デル・レーウは『宗教現象学入門』第1版において、リーマンの著述を「真の宗教現象学」<sup>(18)</sup>と呼んで参考文献に挙げているものの、それ以上の言及は同書においても『宗教現象学』の学説史の箇所においても見られない。他方でトヴェ・テュビェア Tove Tybjerg は『宗教研究の過去と現在』第1巻で、「リーマンは当時もっとも影響力のあった宗教学の入門書に、宗教現象学の概論を著した。このことから、デンマークの根強い宗教現象学的伝統を読み取ることができるだろう」<sup>(19)</sup>と述べている。レーウとテュビェアが言及しているのが、1910年に刊行された事典『歴史と現在における宗教 *Religion in Geschichte und Gegenwart*』第1版の項目「宗教の現象界（宗教現象学）」である。本項でリーマンは、「宗教現象学は、現象界に現れ、経験的・歴史の実体として観察可能な限りにおける宗教を扱う」<sup>(20)</sup>と述べる。彼はこの方法を、宗教を信仰などの「内面的生」から扱うものと対比している。宗教は発展が進むに従ってより内面化していくとも述べられているので、より初期の段階の宗教に着目する意図もここから読み取れる。彼は宗教現象の分類として、「聖なる慣習」、「聖なる言葉」、「聖なる人間」の3項目を立て、その中にさらに呪術や聖典などの小項目を含めて記述を行っている。ここに見られるものは、「宗教現象の学」としての宗教現象学である。しかし1925年の『宗教史大系』第4版においては、表題は「宗教の現象界と観念界」となり、より扱う対象が包括的になっている。また宗教現象学の方法論についての特筆も見られない。この点に関しては同書のリーマンによる宗教研究史の記述も同様であり、ティーレとシャントピー・ド・ラ・ソーセイが言及される箇所においても、彼らの「批判的客観性」とその研究対象の幅広さが評価されるのみで、宗教現象学については触れられていない。この変化に関して、ヤーン・ポズマン・サーンセン Jørgen Podemann Sørensen は現在の視点から評価を行っている。彼は「宗教の現象界」を「演繹的・体系的特徴をもつ彼の姿勢は、比較論的な問題設定に対する実践志向のアプローチを初期のものではあるが確固として形成している。それは今日のデンマーク宗教史においても未だ特徴となっており、ルンドにおいてももっとも良く存続している」<sup>(21)</sup>と評価しているが、それに対し後年のものはこの実践志向のアプローチが不明瞭になっているとしている。この論文はリーマンの宗教史講座設立百周年を記念したシンポジウムからのものだが、そこではリーマンへの批判も多く見られる。サーンセンは同論文で、プロテスタント神学および当時の進化論的な歴史理解がリーマンに影響を与えていたと述べ、「比較論的宗教史は原始的なものから現代のルター派キリスト教への発展を扱い、両者を掘って建て小屋と宮殿のように扱わなければいけないということを、リーマンは疑わなかった」<sup>(22)</sup>と批判している。ギアーツも同様に、近年のポストコロニアル的研究を参照し、リーマンは「未開人」を観察した宣教師の報告に影響され、そうした人々やキリスト教以外の宗教に対して偏見を持っていたと主張している<sup>(23)</sup>。これらの批判は何よりもリーマンの護教

論的側面に向けられているが、その点を評価した論文もある。カーステン・ブレンゴー Carsten Breengaard の「リベラル神学者としてのイズヴァト・リーマン」は、リーマンの宗教史が、教理主義に陥る既存の神学に反発し、自由な神学を探究する過程で形成されたと述べている。注目すべきは以下の箇所である。「今日支配的なパリスとヴィトフェルトによる宗教史は (...) 強固な宗教批判の系譜からなっている。そしてこのことは、リーマンが最終的に生み出したもの、すなわち宗教の実存的な要素は宗教学からほとんど消え去ってしまったことを意味している」<sup>(24)</sup>。ここからわかるのは、リーマンに見られた神学的関心は、その後のデンマーク宗教学からは取り除かれ、宗教批判の側面が顕著になっているということである。

### 3-2. ヴィルヘルム・グランベク

グランベクはパリス、プリュツ・ヨハンセン、シーアの3人の弟子を育て、以後のデンマーク宗教学に多大な影響を及ぼした人物である。プリュツ・ヨハンセンの記述によると、グランベクはコペンハーゲン大学でさまざまな言語を学び、トルコ語の発音の歴史を博士論文の主題とした。その後彼は宗教史に関心を移したが、初期に依拠していたのは人類学、とりわけオーストラリア先住民の研究であった<sup>(25)</sup>。1915年に刊行された『原始宗教 *Primitiv Religion*』でグランベクは、自然人の思考を発達の初期段階とみなすタイラーやマレットら「進化論者」を批判している。彼の考えでは、自然人の思考はヨーロッパ人のものとはまったく異なったものであり、自然人は西洋科学とは異なった仕方でも自然を理解し、人間と動物の間に独特の関係を作り上げたとしている。

グランベクはさらに、神秘主義の研究にも向かうようになる。彼の定義する神秘家とは、他との境界が消え去り、一つになるような満たされた体験をする人物であった。ここで特徴的なのは、そうした神秘家として、ヘルダーやワーズワース、ゲーテなどの詩人が含まれていることである。1933年の著作『ウィリアム・ブレイク：詩人、芸術家、神秘家 *William Blake, digter, kunstner, mystiker*』にもこの視点が反映されている。その後彼は、イエスやパウロに関する著書を著すとともに、大学や市民大学講座でキリスト教、芸術、現代文化についての講義を行い、幅広い影響を及ぼした<sup>(26)</sup>。

グランベクに対する後世の評価として、テュビエアの記述を引用してみよう。彼女は、「グランベクは、文献学的・歴史的アプローチを宗教研究の根本に据えた」<sup>(27)</sup>と述べ、その後の研究へのグランベクの影響は大きいとしているが、他方でこのように記している。

グランベクは1922年に、宗教史学者の前に開かれる多様で魅力的な世界について述べている。

彼が幸運なのは何より、人間とは何なのかということに関するあらゆる視野の狭い説明を吹き飛ばすという体験ができるということである。彼の課題は、生の豊かさを描き出し、人間がいかに大きいのか、その大きさがいかに途轍もないのかということを示し、自らの奥底の統一性を探求するよう同時代人を鼓舞することである (Grønbech 1922) <sup>(28)</sup>。

ここでは、グランベクにとってのもう一つの重要な問題である文化批判が表現されている。それは、彼の晩年にはますます顕著になっていった。

これらの大胆な言葉は後継者には受け継がれず、文化批判への参加が育つことはなかった。神学とは距離が置かれたのである。1960年にオーフスの宗教史教授に指名されたハルフダン・シーアが神学者であったことは、彼の宗教史と神学の境界線を曖昧にするには至らなかった。<sup>(29)</sup>

ここからは、歴史的・文献学的アプローチがデンマーク宗教学の基礎になったのに対し、宗教の有する力を現代社会に生かすというグランベクの試みは「神学的」として退けられたことがうかがえる。

### 3-3. グランベクの教え子世代とそれ以後

20世紀半ばから始まるグランベクの次世代については、それほど時間が経っていないため研究は少ないが、オーフス大学の最初の教授であるシーアには記念論集が存在している。シーアは上述の通り神学の学位を有していたが、彼の宗教史家としての研究は、彼が1947年から参加した第三次デンマーク中央アジア調査隊<sup>(30)</sup>での成果を基盤としている。そこでシーアはパキスタンのチトラルにおけるカラシュ人や、ヒマラヤ山脈のシッキムにおけるレプチャ人の調査と資料収集を行った。ギアーツによれば、シーアの第一の貢献はブリュツ・ヨハンセンと共同でコペンハーゲン大学とオーフス大学共通の研究プログラムを作り上げたことである。そのプログラムでは、研究対象は「自然人の宗教」、古代中東、ギリシア、ローマの「高等宗教」および、仏教、ヒンドゥー教、道教、儒教、神道、イスラム教からなる外来の「高等宗教」を含んでいた<sup>(31)</sup>。採用された方法は、言語によるテキストの読解という文献学的手法と民族学的手法、および比較論的な宗教現象学からなっている。ギアーツは、「シーアは方法論的ないし洞察的次元より、経験的・個別的次元により関心があった。しかし彼はどちらの次元も重要だと理解していた。こうして、彼自信の研究と教授の仕方のために、1960年代、70年代に広がっていた宗教や他の主題に関する多くの刺激的な哲学的、言語学的、人類学のおよび文学的理論は、宗教のテキスト研究や民族学的・歴史的記述に比べて副次的なものとなされた」<sup>(32)</sup>と述べている。この点を考慮すれば、上述の共通プログラムにおける宗教現象学的視点の強調は、ブリュツ・ヨハンセンの見解を反映しているものとみなせるだろう。同プログラムは1967年に成立し、以後の授業はこれに基づいて計画された。

その他の人物については、コペンハーゲン大学のマーギト・ヴァーブアウ Margit Warburg が方法論的方向性について記している。彼女によれば、グランベクの伝統はブリュツ・ヨハンセンおよびシーアの系譜と、パリスおよびヴィトフェルトの系譜に分かれたとみなすことができる。前者は歴史的・社会学的であり、後者は文献学的・心理学的である。両者はロバートソン・スミス、デュルケム、グランベクを先駆者として共有しているが、パリスとヴィトフェルトはさらにヴェーバーの社会学的視点に影響を受けており、ブリュツ・ヨハンセンは集団心理学的次元を取り入れているという<sup>(33)</sup>。2つの系譜はコペンハーゲン大学において宗教史と宗教社会学の並立という形で具体化した。その後は統合が進んでいるというのがヴァーブアウの見解である。

テュビエアはさらに、両分野の1970年代以降の方向性について述べている。宗教史ではデュメジルの著作が翻訳され、レヴィ＝ストロースの構造主義が大きな影響を与えた。主題としては、神話、儀礼、神秘主義に関心が集まった。またバーガーやルックマンの社会学も導入された。他方で宗教社会学においては、マイノリティ研究が大きな主題となった。そこではインタビュー調査、質問紙調査、フィールドワークといった方法が用いられ、より大規模な量的研究も存在する<sup>(34)</sup>。

#### 4. デンマーク宗教学の特徴：宗教現象学と CSR

##### 4-1. 宗教現象学への幅広い言及

次に、デンマーク宗教学の特徴といえる 2 つのトピック、すなわち宗教現象学と宗教認知科学についてより詳細に明らかにしていきたい。デンマーク宗教学において宗教現象学が特別の位置を占めているのは序論で述べた通りだが、その傾向が顕著になるのは 1970 年代以降である。60 年代末には、エリアーデ<sup>(35)</sup>の『聖と俗』と『永遠回帰の神話』、ファン・デル・レーウの『宗教現象学入門』がデンマーク語に訳されている。そして、1977 年にオーフス大学のスミト・ハンセンが著した『宗教現象学』はある重要な転換を記している。序文で彼が述べてところによると、1976 年に公立の小中学校にあたる国民学校 *folkeskole* の法律が改正され、「外来宗教」が対象に含まれることになった。それに先立つ国民学校教員の教育に関する指示において、「宗教現象学的観点における一般宗教的要素」がカリキュラムに加えられたために、この内容に関する教員教育の参考書として作られたのが、本シリーズだという<sup>(36)</sup>。実際に、1975 年の『国民学校の教師教育に関する指示 *Bekendtgørelse om uddannelse af lærere til folkeskolen*』に、上述の「宗教現象学的観点における一般宗教的要素。さまざまな文化からの資料が用いられる」<sup>(37)</sup>という記載がある。このように宗教現象学は国民学校の教師に必須の指導内容とされたが、スミト・ハンセンが作成した参考書の構成は、宗教活動を誕生、成人、結婚、死の 4 段階に分け、それに日々の儀礼を加えた 5 局面において、さまざまな宗教がいかなる実践を行っているかの実例を提示するというものである。対象となる宗教はキリスト教、ユダヤ教、イスラム教、ヒンドゥー教や北米先住民の宗教などである。彼によれば、本シリーズの記述は宗教現象学のおよび宗教史的形態をとっており、前者については、「さまざまな文化における人が共通の生の状況に対していかに対応しているか」ということの横断的・比較論的研究が収められている<sup>(38)</sup>点が現象学的要素だという。このように、公立学校の教員養成カリキュラムに宗教現象学が組み込まれ、結果としてほとんどの国民<sup>(39)</sup>がその影響を受けるに至ったという点は特筆すべきである。この状況は 21 世紀まで続いている。2011 年の指導要領では、教師に必要な知識と能力の中に「理論と方法」があり、そこに解釈学、社会学、人類学的方法などと並んで「現象学的方法」が挙げられている<sup>(40)</sup>。しかし、2013 年の改訂で「理論と方法」の項目が削除され、キリスト教アイデンティティ教育が強化されたことによって、現象学の名称は姿を消すことになった<sup>(41)</sup>。

他方で、ギムナシウムにおける宗教現象学の教育は続いている。2018 年に改訂された指導要領の「科目の目的」の箇所には「ギムナシウムの宗教科目の教育にとって重要な多数の分析的・宗教学的概念は、古典的ないし近年の宗教現象学的研究伝統および比較宗教学より得られたものである。それらの分野は、宗教学の体系的な『脚』となる」<sup>(42)</sup>という記述がある。さらに教授原則の箇所にも宗教現象学および宗教社会学の概念を用いた比較研究を行うという手法が定められている。上述のように、デンマーク宗教学の役割の一つはギムナシウム教員の養成にあるため、この指導要領に従えば、大学の授業にも同様の視点が導入されることになる。すなわち、デンマークにおいてはすべての段階の公教育と、大学の宗教学において宗教現象学的視点は教えるべきものとされているのだ。

ここまでの記述で、デンマーク宗教学における宗教現象学がいかなるものか、その全体像が掴めるであろう。宗教現象学は何より、基礎的なものである。それは、宗教史とは対置されるが、比較



宗教学とは近いものとみなされている。またその役割は、通文化的に宗教を比較し、概念を体系的に提示することである。この点を踏まえて、オーフス大学の 2017 年度秋学期の宗教現象学の授業内容を見てみよう<sup>(43)</sup>。12 回の授業のうち、初回は宗教学とは何か、宗教現象学とは何かに加え「宗教」概念の定義の問題を取り扱っており、第 2 回は研究史を概観している。第 3 回は「宗教類型論」であり、さまざまな類型が提示される。4 回以降はその類型ごとの学習であり、「神話理論と宇宙創成」「死」「祈り」「さまざまな儀礼の類型と過程」「宗教的専門家」などが存在する。用いられる文献は一次資料と理論に分かれており、例として学生は祈りに関する理論を読んで準備し、授業では聖書やクルアーン、「アモンへの祈り」を読んで議論を行う。理論に関する資料はデンマークの研究者による著作や論文ないしは *Encyclopedia of Religion* 第二版の各項目から取られている。ここからわかるように、この授業は類型化を行い、類型ごとに各宗教を比較するという方法をとっており、それはスミト・ハンセンの参考書の構造と類似している。また同時に、理論の箇所でもレーウやエリアーデなどいわゆる宗教現象学者に言及していないことにも着目すべきだろう。それぞれの概念については、できるだけ最新の知見を反映しようという意図がうかがえる。

このように実施されているデンマークの宗教現象学が、一般に理解されているそれとはいくつかの点で異なっていることには注目すべきである。例として、コックスの『宗教現象学入門 *An Introduction to the Phenomenology of Religion*』で実践されている宗教現象学はフッサール現象学を基盤とし、エポケーや本質直観を用いながら信者の主観的体験の理解を目指すものであるが、上述の授業にも、現代の研究者の記述にもそうした要素は見られない。以下で詳述するシンディンク・イェンセンも、このような理解とは「別の宗教現象学の理解が存在している。スカンディナヴィアの伝統では、宗教現象学は一つの方法ではなく、宗教史と並ぶ、あるいはそれに含まれる分野だとみなされてきた。それは分類的、類型的、記述的であり、厳格に経験的な分野だと自認している」<sup>(44)</sup>と述べている。同様の概念規定は、同じ北欧の研究者であるイルッカ・ピュシアイネンも示しており、彼はこれを「スカンディナヴィアのいわゆる地域的現象学」<sup>(45)</sup>と呼び、フィンランドのラウリ・ホンコを先駆者として挙げている。

デンマークの宗教現象学はただ教育のみに用いられているわけではなく、それを応用した研究も存在する。以下ではその新たな宗教現象学を記述する前に、それに影響を及ぼした認知科学的観点の研究の普及について述べよう。

#### 4-2. 宗教認知科学的観点の取り入れ

デンマークの宗教学、とりわけオーフス大学の研究者は、宗教認知科学 (CSR) の視点を導入したことで知られている。ギアーツは国際宗教認知科学会 (IACSR) の会長を一時期務めており、*Journal for the Cognitive Science of Religion* の創刊にも関わっている。またオーフス大学のイエスパ・サーンセン Jesper Sørensen は『呪術の認知的理論 *A Cognitive Theory of Magic*』を著し、同じくウフェ・シュト Uffe Schjødt は宗教の心理学的研究を多数行っている。しかし前述のように CSR の創立に携わったのは米国、英国、フランスの宗教学者と人類学であり、デンマークの研究者はその初期には参加していなかった。では彼らはいつ、どのような過程で CSR という分野に加わったのだろうか。

この疑問への回答としては、ギアーツらによる記述が存在する。それによると、彼らは 1980 年

代からとりわけ儀礼に関する理論に関心を持っており、「Groningen Working Group for the Study of Religious Symbols」として儀礼理論を研究していた。1999年にはオーフス大学の研究者を中心に「儀礼理論研究所」という研究会が作られ、その後「宗教理論研究所」へと発展した。この過程で彼らはトーマス・ローソンやパスカル・ボイヤールの認知的理論に出会い、とりわけ関心を強めていく。そうした理論の研究のうち、最初の成果は1999年のボーディル・クラウセン Bodil Klausen による『宗教と認知 *Religion og Kognition*』であり、本書では認知科学の基礎的知識や、ボイヤールやローソンによる初期の CSR 理論がまとめられている。また上述のサーンセンの著作の元となった博士論文も2000年に提出されている。それに加え、ギアーツらは2002年に「宗教的ナラティブ・認知・文化」の研究助成を得て、著名な研究者を招いて学術大会を開くなど研究を進めた。これは続く「宗教・認知・文化」と合わせて6年間の研究プロジェクトとなった<sup>(46)</sup>。この頃からオーフス大学内の認知科学系研究センターとの協力が進められ、その計画は大学内の複数の学科が参加する「MINDLab」プロジェクトとして結実した。これは政府の科学・技術・革新省<sup>(47)</sup>による助成であり、1.32億クローネ（約23億円）を5つの部門で分配したが、その1つ「認知と文化」の代表をギアーツが務めており、上記の宗教学の研究者も参加している。2009年から5年間続いたこのプロジェクトにより脳イメージングなどの機械が整備され、多数の成果が発表された。プロジェクト終了後も、研究設備は「Interacting Minds Centre」として残り、宗教学との協力も続いている。そして2014年には、英国ベルファストのクイーンズ大学との共同で、CSRの正式な博士課程プログラムが設けられた。

このように、新たな分野である CSR は、理論の研究、研究大会の開催、認知科学の研究施設との協力、共同の研究プロジェクトの立ち上げ、および CSR の教育体制の確立という過程を経てオーフス大学の宗教学に組み込まれていったことがわかる。その際にもっとも貢献した人物はギアーツであるが、これには彼の組織的能力もさることながら、その一貫した宗教理論への関心が CSR の導入のきっかけとなったと考えられる。彼は1995年の教授就任講演で、宗教学の研究史を詳述している<sup>(48)</sup>。ここで特徴的なのは、彼は特定の分野や研究者による影響よりも、IAHRをはじめとする国際的な学術大会における方法論的傾向性に重点を置いて分析している点である。ギアーツの見方によれば、1970年代に停滞していた方法論的議論は、1980年代の終わりに再度盛んになった。その画期としてみなされているのが、彼自身も参加していた1988年のIAHR マールブルク地域大会と、翌年のワルシャワ大会である。両大会には1990年に『宗教を再考する』で CSR の始まりを告げることになるローソンも参加しており、ギアーツも上記講演でローソンの儀礼理論について言及していることから、彼の宗教理論への幅広い関心が新たな理論的潮流としての CSR の発見に結びついたことは明らかである。

その上、ギアーツはローソンらによって成立した CSR に欠けている面を指摘してもいる。2009年の論文で、彼は「標準的な宗教認知科学はあまりに心理主義的、計算的、科学主義的、非歴史的、および特定文化に結びついている」<sup>(49)</sup>と述べ、歴史的・社会的側面の重要性を強調している。他方で標準的な宗教学はあまりに文献主義的、文化主義的、反科学的、反理論的等とも述べられており、両者のバランスを取る意図が存在することがうかがえる。

#### 4-3. 宗教現象学と CSR の結びつき：「新宗教現象学」

ここまでデンマーク宗教学の特徴として宗教現象学と CSR を挙げたが、両者へは決して無関係のものではない。むしろ何人かの研究者は、CSR を取り入れた新たな宗教現象学を提唱している。その代表はシンディング・イェンセンである。彼は『宗教学の新基軸 *The Study of Religion in a New Key*』において、「宗教現象学の新基軸」<sup>(50)</sup>を提供すると述べている。本書で彼が行っているのは、人類学と言語学をモデルとし、宗教学を一般化が可能な分野とするための哲学的基盤を据えることであるが、その際に認知科学的知見が参照されている。「一般的・比較論的研究は必然的に認知的視点と分析を含まねばならない。というのも認知的理論は比較と一般化の試みを促進する多くの点をもたらすからである」<sup>(51)</sup>と述べられているように、宗教の認知的理論は一般化を正当化しうるものとみなされている。彼の提唱する「新宗教現象学」が実践に移されたのが、続く著作『宗教とは何か *What is Religion?*』である。「本書は分類の宗教現象学の最新版を提供する試みである」<sup>(52)</sup>と明言されており、その内容はタイラー、デュルケム、フロイトなど古典的理論とともにポイヤヤーやイエスパ・サーンセンの CSR 理論を参照しながら、宗教のさまざまな側面についての類型や一般像を描写するものである。扱われているのは宗教的信念、言語、儀礼、制度であり、その構造はこれまで記述してきたデンマークの宗教現象学を踏襲している。

このような形の新宗教現象学は、決して彼のみによるものではない。テュビエアの『宗教研究の過去と現在』第 2 巻には、最新の研究視点として権力分析やジェンダー研究と並んで、「新宗教現象学」の項目が存在している。ここでは、「宗教現象学は、古典的宗教現象学の拡大と、それへの批判の双方から発展したものであり、宗教的表現およびそうした表現が自ら現れる形式についての通文化的比較研究として理解したい」<sup>(53)</sup>と述べられており、イェンセン以外にも、ウィリアム・ペイドンやキャサリン・ベル、ブルース・リンカンの名前が挙げられている。また同様の視点は、コックスの『宗教現象学入門』にも見られる。彼は「宗教現象学の新たな表現形態としての宗教認知科学」という項で、ポイヤヤーやピュシアイネンの CSR 理論が、還元的であるという点を除いて古典的な宗教現象学の視点と近いとし、「宗教認知科学と宗教現象学は、宗教の学術的研究の新たな発展を生むために統合されうるだろう」<sup>(54)</sup>と述べている。彼によれば、両者の共通点は人間の認知構造の普遍性の仮定や宗教の類型化、日常空間における非日常的な仕方での行為者の活動に着目している点などにあるという。

以上から明らかになるように、デンマーク宗教学において宗教現象学と CSR は相互に関係している。CSR の導入の背景には現代の宗教理論への関心が存在したことはすでに述べたが、CSR はそうした理論の中でも一貫して支持されている宗教現象学の枠組みに合致した通文化的・一般的理論として着目されたのであり、CSR の知見を用いて、新宗教現象学の展開もまた可能となったのである。テュビエアの著作でも新宗教現象学の視点はリーマンに由来することが触れられているが、その伝統とも一致するゆえに、宗教現象学と CSR はデンマーク宗教学、少なくともオーフス大学の宗教学の根幹をなすものといえるだろう。

#### 4-4. 現代宗教の社会学的研究

ここまで、デンマーク宗教学の特徴として宗教現象学と CSR を挙げたが、無論これがデンマーク宗教学のすべてではない。多くの研究者は日本や米国にも見られる研究手法を用いているし、方法

論的特色の地域差も存在する<sup>(55)</sup>。ここではその全体を扱うことはできないが、もう一つの特徴的研究として、現代宗教に対する社会学的研究を概観しよう。

オーフス大学の「現代宗教センターCentre for Contemporary Religion」は現代デンマーク社会の宗教に対して継続的な研究を行っている。その背景には、移民の増加によって多数の宗教団体が設立されたことや国教であるルター派の「国民教会 Folkekirke」の信者数減少など、宗教的環境の変動が存在している。この変動の調査のために彼らが最初に取り掛かったのが宗教の統計である。デンマークでは教会庁が宗教団体の認可を管轄しているが、そこでは信者数の調査は行われていない。そのため「今日のデンマークの宗教がどのように見えるかということに関する神話や言説、理論を実証ないし反駁するために簡潔で優れた数字が必要である」<sup>(56)</sup>として、統計調査が実施された。認可されたすべての宗教団体に質問紙が送られ、信者数だけでなく宗教的専門家の数や建物数、儀礼の参加者数や会費までを尋ねた。その成果は雑誌『デンマークの宗教 *Religion i Danmark*』として毎年刊行され、現代宗教の状況を知るための重要なデータとなっている。

同時に、個々の宗教や共同体についての詳細な研究も存在している。ヨン・ボルプの『宗教・文化・統合 *Religion, kultur og integration*』はデンマークにおけるベトナム移民共同体を対象とした研究であるが、そこでは質的・量的調査の双方が用いられている。彼は 27 人へインタビューを行うとともに、36 項目にわたる質問紙調査が 250 人に行われ、そこで得られた回答が研究の基礎となっている<sup>(57)</sup>。また、同じくオーフス大学のラス・エーリン Lars Ahlin は代替医療やニューエイジについての研究を行っているが、そこでも参加者の信念や実践、社会的背景に関する多数の質問紙調査の結果が用いられている<sup>(58)</sup>。これら 3 つの研究に共通するのが、質問紙による量的研究の方法であり、フィールドワークやインタビューによる質的研究と組み合わせられて、より幅広い視野で対象の把握を可能にする方法が確立されているといえる。

## 5. デンマークの宗教学者の社会における役割

### 5-1. 公教育への関わり

ラッセル・マッカチオンやデヴィッド・チデスターに代表される 1990 年代以降の数々の批判的研究に明らかのように、宗教学という営為はそれを取り巻く政治的・社会的環境と切り離して理解することはできず、この点はむしろデンマークの宗教学にも当てはまる。そこで以下では、デンマーク宗教学の社会的役割や政治的姿勢についての考察を行ってみたい。

その制度の記述においてすでに触れたように、デンマーク宗教学は公教育と深い関わりを持っている。3 つの大学の宗教学部門はギムナシウムの教師養成の役割を有している上に、スミト・ハンセンの『宗教現象学』は国民学校の教師養成のための参考書であった<sup>(59)</sup>。この 2 段階の公教育のうち、まずは国民学校の宗教の授業について触れてみよう。国民学校の「キリスト教学・宗教」の授業は、ある時期までは国教である国民教会についての教育を行う教派的な授業であった。その状況が変わったのが 1975 年であり、これ以降教派教育は廃止され、同時に「外来宗教」も教えられるようになった<sup>(60)</sup>。しかし、1983 年に移民法が成立し、仏教徒やイスラム教徒が増加し始めると、国内ではアイデンティティの確立や移民の同化のために、デンマーク文化の教育の必要性が訴えられるようになる。そしてキリスト教もデンマーク文化の根本であるとし、文化教育の一環としてキリスト教を重視する方針が 1993 年より始まった。ティム・イェンセンとカーナ・ケルセン Karna

Kjeldsen は、これは特定宗教を教える大文字の教派教育ではないが、宗教的意図のある小文字の教派教育だと指摘している<sup>(61)</sup>。その後も右派への政権交代と反移民を強く主張するデンマーク国民党 Dansk Folkeparti の閣外協力によりこの方針はますます進み、2009年には試験科目となるなど、この科目はより重要視されるようになっていく。

こうした状況に対し、南デンマーク大学のティム・イェンセンは反対の意思を表明している。彼は1996年に、政策決定者に向け非教派的な宗教教育の必要性を訴える文章を作成したが、それが刊行されることはなかった<sup>(62)</sup>。そして彼は2008年に、再度同様の提言を行っている。イェンセンが提案するのは宗教研究に基づいた宗教教育であり、それは非宗教的ないし宗教横断的であるため、世俗国家にとってふさわしいと彼は述べている。その際に宗教学が果たしうべき役割については、「多種多様な幅広い経験的資料の歴史的研究に加え、通時的・共時的比較（ないし体系的な研究としての宗教現象学）を通して、宗教研究は一般的カテゴリーや概念、分類の重要な生産者となってきたのであり、それらは中立的・宗教横断的な宗教の学術的研究と同様に、中立的・宗教横断的な宗教教育も可能にし、価値のあるものとするのである」<sup>(63)</sup>と述べられている。

続いてギムナシウムにおいては、その授業は初期から非教派的なものであり、教師養成の担い手も徐々に神学から宗教学へと移っていった。科目には必修の宗教Cと選択の宗教Bがあり、後者の方が時間数は多い。宗教学が教師養成に携わっているゆえに、「ギムナシウムとHF<sup>(64)</sup>の宗教の授業は一般に、宗教の学術的研究と密接に結びついており、両者の間にはさまざまな協力関係が存在する」<sup>(65)</sup>とされている。実際に、ギムナシウムの宗教の授業には大学での宗教学の準備教育としての側面もある。例として、シンディング・イェンセンの『これが宗教だ *Det er religion*』はギムナシウムとHFのための教科書として書かれているが、「デンマークにはギムナシウムとHFに宗教教育が存在するが、この教育は特定の教会や、宗教とは一切結びつかないものである」<sup>(66)</sup>と述べられている。そして彼は、宗教について知るためには、まず宗教とは何かに関する概念と理論を知らねばならないとして、宗教学の研究史を提示する。むしろ、この教科書全体がヒュームやカントに始まりタイラー、フレイザー、デュルケムからレヴィ＝ストロースに至る研究史の記述に費されており、具体的な宗教は一切扱われていない。これは宗教教科書として異例のことであろう。

以上を要約すると、デンマークの宗教学者は、初等・中等教育に大学での宗教学を浸透させるといふ公教育の「宗教学化」を目指しているといえる。その方針は、既存の表現を用いるならば宗教情操教育や価値教育からは距離を置いた宗教知識教育であり、とりわけ宗教学的概念や理論を含む点に特徴がある。ギムナシウムでの教育は大学での宗教学とほぼ連続しているためにこの意図は達せられており、国民学校に対しても宗教学化のための活動が続けられている。

## 5.2. 宗教学者の宗教に対する姿勢

ドナルド・ウィーベの1984年の論文「学術的宗教研究における度胸の欠如」<sup>(67)</sup>以来、宗教研究の内部の神学的意図にはとりわけ注意が払われるようになっていく。ウィーベが企図した「隠れた神学」を暴くこと以外にも、宗教学者の宗教に対する姿勢を問うことは分析の視点として有用であるため、以下では両者の関係を論じよう。

これまで見てきたように、デンマークの宗教学者もキリスト教神学に対してはさまざまな姿勢をとってきた。リーマンとグランバクは宗教的意図を持っていたとされるが、グランバクの次世代、

パリやヴィトフェルト、シーアはそうした姿勢からは距離を置くようになった。現在の研究者も後者の姿勢に近いといえるが、宗教との関係性は、国教である国民教会とその他の宗教とのバランスを取ろうとする傾向が見られる。第一の例は宗教団体の認可に関するものである。デンマークでは、国民教会以外の宗教団体は法律で規定されると憲法第 69 条に記されているが、そのような法律はこれまで存在していなかった。初期のいくつかの宗教は国王令によって認可され、近年では国民教会を統括する教会庁が認可を行っていたが、宗教団体の定義と認可を別の宗教が行うことへの批判が持ち上がり、1998 年に宗教学者や法学者からなる諮問委員会が設立され、宗教団体認可の過程に関わるとともに、宗教団体の要件の検討が始められた<sup>(68)</sup>。その成果として、「国民教会を除く宗教団体に関する法律 *Lov om trossamfund uden for folkekirken*」が 2017 年 12 月に成立し、宗教団体が法で定められるようになった。

別の例として、新宗教への批判運動に対しても宗教学者が異議を唱えている。ギーツらの述べるところによると、国内で増加するニューエイジ的新宗教に対し、オーフス大学の神学者が「対話センター」を組織し研究を始めたが、それは新宗教を社会規範への脅威と見る批判的なものであり、その代わりにキリスト教道徳の推進を説く政治的キャンペーンでもあった。これに対し、オーフス大学や南デンマーク大学の宗教学者は「新宗教研究ネットワーク」を組織し、中立的な研究を行うとともに、行き過ぎた反カルト運動に警鐘を鳴らしてきた<sup>(69)</sup>。

このように、何人かの宗教学者はマイノリティの宗教への抑圧を批判し、中立的な姿勢を保っている。しかし「中立」の姿勢は果たして可能であるかどうかに対する疑問もある。ピアギデ・シェベレアン・ヨハンセン Birgitte Schepelern Johansen の論文は、タラル・アサドの世俗の形成論をベースに、2 大学における宗教学の授業の参与観察の結果を伝えているが、彼女によると大学では研究者の宗教的志向が見つけ出され、「もし発見されたら、その宗教的要素は事物が真にどうかであるかの純粋な伝達を阻害するバイアスとして締め出されるべき」<sup>(70)</sup>とされているという。その例として、学生が授業中につけていた十字架がバイアスとなりうると注意された出来事が挙げられている。そうした際にはとりわけキリスト教が槍玉に挙がりやすいと指摘されており、キリスト教がマイノリティの宗教を誤解しているとして批判されることはしばしばだという。こうした、デンマークの大学に見られる「学術的領域からの宗教の締め出しと、後者の前者への従属、およびこのカテゴリーのさまざまな例が原理的に等しいとする認識」<sup>(71)</sup>が政治的な姿勢とみなしうるとするのがヨハンセンの結論である。とはいえ、このような姿勢をどう評価するかはまた別の問題であり、これまでの例では宗教学者は一貫して多数者の権力に抗しているといえる。いずれにせよ、彼らがそのような社会的役割を有している点には注目すべきだろう。

以上のデンマークの宗教学者と社会との関係を総合するならば、まず公教育の場では、国民学校に対しては比較的弱い影響を、ギムナシウムに対しては教師を大学で養成することによって強い影響を及ぼしている。またここで挙げた以外にも、大学教員は各大学の市民大学講座で講義を行うことや、ギムナシウムで直接授業をすることもある。総じて、宗教学者は教育のすべての段階に関与しているといえるだろう。また宗教学者の役割に関しては、宗教学的観点の重要性を訴えると同時に、マイノリティの視点を強調することで、各宗教の間のバランスを保つことが実践されている。そうした実践は、マスメディアにおける意見表明としても行われている。前述のボルプの新聞記事はその一例である。

## 6. おわりに

本論文では、これまで取り上げられていなかったデンマーク宗教学の制度上の歴史、研究者と理論的方向性、そして宗教学者の現代社会における役割について記述した。最後に、本研究が宗教学一般に対してどのような意味を持ちうるかを述べて締めくくりとしたい。

第一に、デンマーク宗教学の視点を踏まえるならば、何よりも宗教現象学に対する理解の見直しを迫られることになる。前述のように、宗教現象学に対する既存の見解は、エリアーデやレーウに代表される、すでに否定された宗教の体験主義的理解の試みというものが大勢を占めていた<sup>(72)</sup>。しかしデンマークではこれとは異なった仕方でも宗教現象学が理解されており、なおかつそれが必要なものとして実践されてもいるのである。加えて、コックスが着目しているような宗教現象学と近年の認知的宗教研究の親和性についてもさらなる分析を進めるべきである。

第二に、宗教学と宗教教育の関係についても、デンマークの例から多くの示唆が得られるだろう。国内で実施された、公教育における宗教の国際比較は江原武一および藤原聖子によるものが存在するが<sup>(73)</sup>、この二者の研究はいずれもデンマークは対象にしていない。これまでに見てきたようにデンマーク宗教学は公教育に強い影響力を有しているものであり、この主題に対しても資するところは大きいと思われる。

最後に、宗教研究の政治的含意や、宗教学と神学との関係性についての関心が高まる中で、社会に対してたびたび意見表明を行っているデンマークの宗教学者はこれらの問題についての好例となりうるものであり、ある点ではウィーベやマッカチオンの提唱する宗教への批判的アプローチの実践例ともいえる。そうしたアプローチがいかなる結果をもたらすかに関して、デンマークのケースは大いに参考になるだろう。

## 付記

本稿は、平成 30 年度大畠記念宗教史学研究助成基金および、オーフス大学 AUFF Funding Visiting PhD Student Grant の成果の一部である。

## 註

- (1) Eric J. Sharpe, "The History of Religions in Scandinavia, with Particular Reference to Sweden and Finland," in *Religion*, vol. 5, sup. 1, 1975, p. 24.
- (2) Michael Stausberg, "The study of religion(s) in Western Europe III: Further developments after World War II," in *Religion*, vol. 39, 2009, p. 267.
- (3) James L. Cox, *A Guide to the Phenomenology of Religion: Key Figures, Formative Influences and Subsequent Debates*, London, Continuum, 2006, pp. 209-247.
- (4) 藤井修平「宗教認知科学の成立史——多分野的複合はいかにして成し遂げられたか」、『東京大学宗教学年報』XXXV 号、2017 年、45-63 頁参照。
- (5) 以下の内容は、主に Tim Jensen and Armin W. Geertz, "From the History of Religions to the

- Study of Religion in Denmark: An Essay on the Subject, Organizational History and Research Themes,” in *Temenos*, vol. 50, no. 1, 2014, pp. 79-113 を参照している。
- (6) この語は religion と historie の合成語だが、興味深いことに英訳は常に History of Religions と複数形となり、シカゴ大学の宗教学と同一名称となる。
- (7) 以下、本論文のデンマーク語カタカナ表記は新谷俊裕、大辺理恵、間瀬英夫編「デンマーク語固有名詞カナ表記小辞典」(『IDUN—北欧研究』, 別冊 2 号, 2009 年) の記述に従った。ただしオーフスやコペンハーゲンなどすでに慣用的表現が広まっているものはそちらを使用した。
- (8) H. Matzen, *Aarbog for Kjøbenhavns Universitet 1899-1900*, Kjøbenhavn, Gyldendalske Boghandel, 1901, pp. 370-371.
- (9) リーマンがドイツに招かれた状況については、久保田浩「政治・宗教・学問の狭間で——ナチズム期ドイツの『宗教学』」(磯前順一、タラル・アサド編『宗教を語りなおす：近代のカテゴリーの再考』みすず書房, 2006 年), 51-84 頁でも言及されている。
- (10) “Institutter,” (Københavns Universitet, <https://universitetshistorie.ku.dk/organisation/institutter/>), 2018 年 12 月 30 日閲覧。
- (11) Michael Stausberg, “The study of religion(s) in Western Europe (II): Institutional developments after World War II,” in *Religion*, vol. 38, 2008, p. 311, n. 39 によると、ヴィトフェルトはアステカやギリシアの宗教を専門とする宗教史家だが、大学で学ぶ以前は当時の第一党の社会民主党 Socialdemokraterne の特派員として活動するジャーナリストであった。第二次大戦中にデンマークがナチスに占領された際には、ヴィトフェルトはレジスタンスとして活動した。
- (12) この語は宗教 religion と科学 videnskab からなり、ドイツ語の Religionswissenschaft と同一の構造である。オーフス大学の Religionsvidenskab は Religious Studies ではなく the Study of Religion と英訳されている。またコペンハーゲンでは依然として History of Religions が英語名である。
- (13) Institut for Religionshistorie, *Halvdan Siiger og religionshistorien i Århus 1960-1979*, Århus, Institut for Religionshistorie, 1981, p. 14.
- (14) Institut for Religionshistorie, *Religionshistorie ved Aarhus Universitet 1960-1985*, Århus, Institut for Religionshistorie, 1985, pp. 22-23.
- (15) Jensen and Geertz, *op.cit.*, p. 106.
- (16) Jørn Borup, “Religionskritikkens nødvendighed,” (Kristeligt Dagblad, <https://www.kristeligt-dagblad.dk/kronik/religionskritikkens-noevendighed>), 2018 年 12 月 30 日閲覧。
- (17) Jørgen Prytz Johansen, “Religionshistorie,” in *Københavns Universitet 1479-1979, Bind XI*, ed. by Povl Johs. Jensen, København, G.E.C Gads Forlag, 1979, pp. 1-7.
- (18) Gerardus van der Leeuw, *Einführung in die Phänomenologie der Religion*, München, Verlag von Ernst Reinhardt, 1925, p. 11.
- (19) Tove Tybjerg, *Religionsforskningen før og nu – Historiske rødder*, København, Gyldendalske Boghandel, 2010, p. 267.
- (20) Edvard Lehmann, “Erscheinungswelt der Religion (Phänomenologie der Religion),” in *Die*



- Religion in Geschichte und Gegenwart: Handwörterbuch in gemeinverständlicher Darstellung*, zweiter Band, eds. by Friedrich Michael Schiele and Leopold Zscharnack, Tübingen, Verlag von J.C.B. Mohr, 1910, p. 498.
- (21) Jørgen Podemann Sørensen, “Edvard Lehmann og den komparative religionshistorie,” in *Edvard Lehmann og religionshistorien: Et symposium ved fagets 100-års jubilæum i Danmark*, eds. by Erik Reenberg Sand og Jørgen Podemann Sørensen, København, Institut for Religionshistorie, Københavns Universitet, 2001, p. 36.
- (22) *Ibid.*, p. 35.
- (23) Armin W. Geertz, “Komparative strategier hos Edv. Lehmann: Et tilbageblik på den tidlige danske religionshistorie,” in *Edvard Lehmann og religionshistorien*, pp. 39-48.
- (24) Carsten Breengaard, “Edv. Lehmann som liberalteolog,” in *Edvard Lehmann og religionshistorien*, p. 21.
- (25) Prytz Johansen, *op.cit.*, pp. 17-18.
- (26) *Ibid.*, pp. 27-34.
- (27) Tove Tybjerg, “Religionsvidenskabelig forskning i perioden 1970-95 – status og perspektiver,” in *Dansk teologisk og religionsvidenskabelig forskning*, eds. by Kirsten Nielsen and Inge M. Bryderup, København, Statens Humanistiske Forskningsråd, 1996, p. 24.
- (28) Vilhelm Grønbech, “Religionshistoriens midler og opgaver,” *Nationaltidende Aftenudgave*, 9-10, 1922.
- (29) Tove Tybjerg, “Religionsvidenskabelig forskning i perioden 1970-95 – status og perspektiver,” pp. 24-25.
- (30) 最初の探検隊は1936年に開始されており、先行するスウェーデンのヘディンの探検隊や大谷探検隊と共通の地域の調査が行われた。
- (31) Jensen and Geertz, *op.cit.*, p. 84.
- (32) Armin W. Geertz, “Halfdan Siiger and the History of Religions at Aarhus University,” in *In the Footsteps of Halfdan Siiger*, eds. by Ulrik Høj Johnsen, Armin W. Geertz, Svend Castenfeldt and Peter B. Andersen, Højbjerg, Moesgaard Museum, 2016, p. 38.
- (33) Margit Warburg, “Udviklingslinjer i religionsforskningen: religionshistorie og religionssociologi i Danmark,” in *Chaos*, no. 8, 1987, p. 107.
- (34) Tove Tybjerg, “Religionsvidenskabelig forskning i perioden 1970-95 – status og perspektiver,” pp. 25-27.
- (35) エリアーデ自身は自らの方法を宗教現象学ではなく、宗教史ないし形態学と呼んでいたが、コックスをはじめ多くの研究者が彼を宗教現象学者とみなしているため、ここではそれに従う。
- (36) Bent Smidt Hansen, *Religionsfænomenologi: grundbog med teksteksempler*, København, Borgens Forlag, 1977, p. 7.
- (37) Lærerstuderendes Landsråd, *Bekendtgørelse om uddannelse af lærere til folkeskolen*, København, Lærerstuderendes Landsråd, 1975, p. 54.

- (38) Smidt Hansen, *op.cit.*, p. 11.
- (39) デンマークには friskole および privatskole と呼ばれる私立学校もあるが、現時点で 8 割以上が国民学校に通っている。
- (40) “Bekendtgørelse om uddannelsen til professionsbachelor som lærer i folkeskolen,” (retsinformation.dk, <https://www.retsinformation.dk/Forms/R0710.aspx?id=137397>), 2018 年 12 月 30 日閲覧。
- (41) “Bekendtgørelse om uddannelsen til professionsbachelor som lærer i folkeskolen,” (retsinformation.dk, <https://www.retsinformation.dk/Forms/R0710.aspx?id=145748>), 2018 年 12 月 30 日閲覧。
- (42) Undervisningsministeriet, *Religion B/C, hf-enkeltfag, stx, valgfag Vejledning* (Undervisningsministeriet, 2018), p. 7. この直前の箇所では、宗教を「sui generis」とする本質主義への批判が言及されているが、その批判の担い手として、社会構築主義と並んで「新宗教現象学」が挙げられている。
- (43) 以下の内容は、授業で用いられた配布資料「Religionsfænomenologi - E2017 Læseplan (宗教現象学 2017 年秋 semester カリキュラム)」に基づいている。
- (44) Jeppe Sinding Jensen, “Is a phenomenology of religion possible? On the ideas of a human and social science of religion,” in *Method and Theory in the Study of Religion*, vol. 5, no. 2, 1993, p. 114.
- (45) Ilkka Pyysiäinen, *Magic, Miracles, and Religion: A Scientist’s Perspective*, Walnut Creek, Altamira Press, 2004, p. 208.
- (46) Armin W. Geertz and Jeppe Sinding Jensen, “Religionsteoretisk forskning på Institut for Religionsvidenskab,” in *Topforskning ved Aarhus Universitet – en jubilæumsantologi*, ed. by André Wang Hansen, Helge Kragh, Svend Larsen, Palle Lykke, and Jens Chr. Manniche, Aarhus, Aarhus Universitetsforlag, 2003, pp. 359-363, Arming W, Geertz and Jeppe Sinding Jensen, “Introduction,” in *Religious Narrative, Cognition and Culture: Image and Word in the Mind of Narrative*, eds. by Armin W. Geertz and Jeppe Sinding Jensen, London and New York, Routledge, 2011, pp. 6-7.
- (47) 現在では「教育・研究省 Uddannelses- og Forskningsministeriet」に改称している。
- (48) Armin W. Geertz, *Religionshistoriens religionsvidenskabelige profil*, Aarhus, Aarhus Universitet, Det Teologiske Fakultet, 1995.
- (49) Armin W. Geertz, “Too Much Mind and not Enough Brain, Body and Culture: On What Needs to be Done in the Cognitive Science of Religion,” in *Culture and Research*, vol. 4, 2015, p. 7.
- (50) Jeppe Sinding Jensen, *The Study of Religion in a New Key: Theoretical and Philosophical Soundings in the Comparative and General Study of Religion*, Aarhus, Aarhus University Press, 2003, p. 10.
- (51) *Ibid.*, p. 424.
- (52) Jeppe Sinding Jensen, *What is Religion?*, London and New York, Routledge, 2014, p. 78.

- (53) Tim Jensen and Jørgen Podemann Sørensen, “Nyere religionsfænomenologi,” in *Religionsforskningen før og nu – Nyere tid*, København, Gyldendal, 2015, p. 340.
- (54) James L. Cox, *An Introduction to the Phenomenology of Religion*, London, Continuum, 2010, p. 166.
- (55) 2018年3月26日に行われたインタビューでギアーツが語ったところによると、デンマーク国内にも地域差があり、ユーラシア大陸に位置するオーフスでは英米およびオランダとの結びつきが強い一方で、経験主義的傾向の強いスウェーデンに近いコペンハーゲンでは理論への関心が低く、CSRにも懐疑的だという。とはいえ、宗教現象学に関してはブリュツ・ヨハンセンなどコペンハーゲンの研究者にも言及が見られることは述べた通りである。
- (56) Marie Vejrup Nielsen, Jørn Borup, and Lene Kühle, “Introduction,” in *Religion i Danmark*, vol. 1, 2009, p. 8.
- (57) Jørn Borup, *Religion, kultur og integration: Vietnameserne i Danmark*, København, Museum Tusulanums Forlag, 2011, p. 173-182.
- (58) Lars Ahlin, *Krop, sind – eller ånd? Alternative behandlere og spiritualitet i Danmark*, Højbjerg, Forlaget Univers, 2007.
- (59) 国民学校の教師は教育大学で養成されるが、その養成を行う教育大学の教師の職に宗教学出身者が就くこともある。
- (60) Tim Jensen and Karna Kjeldsen, “RE in Denmark - Political and Professional Discourses and Debates, Past and Present,” in *Temenos*, vol. 49, no. 2, 2013, p. 194.
- (61) Ibid., p. 197.
- (62) Tim Jensen, “RS based RE in Public Schools: A Must for a Secular State,” in *Numen*, vol. 55, 2008, p. 126.
- (63) Ibid., p. 134.
- (64) 「高等準備過程」を意味する Højere Forberedelseseksamen の略称。ギムナシウムを出ていない人を対象に、2年間の大学入学の準備教育を行う。HFにもギムナシウムと近い形の「宗教」の科目が存在する。
- (65) Tim Jensen and Karna Kjeldsen, *op.cit.*, p. 207.
- (66) Jeppe Sinding Jensen, *Det er religion – en historisk mosaik*, København, G.E.C. Gads Forlag, 2003, p. 14.
- (67) Donald Wiebe, “The Failure of Nerve in the Academic Study of Religion,” in *Studies in Religion/Sciences Religieuses*, vol. 13, no. 4, 1984, pp. 401-422.
- (68) Armin W. Geertz and Mikael Rothstein, “Religious Minorities and New Religious Movements in Denmark,” in *Nova Religio*, vol. 4, no. 2, 2001, p. 301.
- (69) Ibid., pp. 304-307.
- (70) Birgitte Schepelern Johansen, “‘Doing the secular’ Academic practices in the study of religion at two Danish universities,” in *Arts and Humanities in Higher Education*, vol. 10, no. 3, 2011, p. 287.
- (71) Ibid., p. 290.

- (72) ただし, Thomas Ryba, “Phenomenology of Religion,” in *The Blackwell Companion to the Study of Religion*, ed. by Robert A. Segal, Malden, Blackwell Publishing, 2006, p. 91-121. では本質探究的宗教現象学と分類的宗教現象学が区別されており, ティーレ, シヤントピー・ド・ラ・ソーセイ, クリステンセンが後者に該当すると記されている。デンマークの宗教現象学も, この系譜に属するものとみなせるだろう。
- (73) 前者は科学研究費補助金基盤研究 (C) 「公教育の宗教的寛容性および共通シラバスに関する国際比較研究」, 後者は科学研究費補助金基盤研究 (C) 「ポスト多文化主義における公教育と宗教の関係」 およびその研究成果を参照。

## The Study of Religion in Denmark: History, Methods, and Social Roles of the Scholars

Shuhei FUJII

This paper clarifies the history and current states of the study of religion in Denmark, focusing on its organizational, methodological, and social aspects. Although Danish study of religion has a long and unique tradition, little has been known about it.

There are three departments of the study of religion in Denmark: The University of Copenhagen, Aarhus University, and the University of Southern Denmark. Although the first chair was established in 1900, its scale of study expanded greatly in the 1980s. Edvard Lehmann, who occupied the first chair, founded the discipline by introducing Dutch phenomenology of religion. Vilhelm Grønbech, his successor, not only established historical and philological research methods, but also educated several scholars who played an important role in the academic circles in Denmark.

Phenomenology of religion is an important characteristic of the study of religion in Denmark. Phenomenology of religions has been understood as a method that compares religions cross-culturally and elaborates religious concepts systematically. Moreover, scholars at Aarhus University are known for their methods of the cognitive science of religion. They introduced this novel discipline by researching cognitive theories of religion and collaborating with centers of cognitive science. As a result of combination of phenomenology of religion and the cognitive science of religion, a “new phenomenology of religion” is proposed.

Danish study of religion is also connected with public education. The scholars try to promote non-confessional education of religion at folkeskole (primary and lower secondary education), while training teachers of religion at gymnasia (upper secondary education). Scholars of religion, furthermore, play a role in underscoring perspectives of minority religions, by criticizing the excesses of majority religions.